

平成26年度 病害虫発生予報 第8号

平成26年11月21日
栃木県農業環境指導センター

〇いちごうどんこ病、トマト葉かび病は予防と初期防除が重要です。

予想期間 11月下旬～12月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

(1) 発生予想 発生量：**やや多い**

(2) 根拠 ・現在の発生量は平年並（平年比：ほ場率63%、発生株率63%）。(±)
・向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並～多く、日照時間は平年並～少ない見込みで、発生にやや適している。(±～+)

(3) 対策 ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適正な温度管理やかん水を行う。
・現在発生が見られなくても、今後発生する可能性があるため、予防を主体にアフェットフロアブルやガッテン乳剤等を散布する。
・発生を予防するため、保温開始後は硫黄粒剤でくん煙する。硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるため、長時間の使用は避ける。

2 いちご ハダニ類

(1) 発生予想 発生量：**平年並**

(2) 根拠 ・現在の発生量は平年並（平年比：ほ場率130%、発生株率127%）。(±)
・主要薬剤の殺虫効果が低下しており、密度抑制が困難である。(+)
・向こう1か月の気温は平年並、日照時間は平年並～少ない見込みで、発生にやや適していない。(－～±)

(3) 対策 ・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・化学農薬に対する感受性低下が著しいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しない気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。
・発生が見られたら葉裏のハダニ類を洗い流すように気門封鎖剤を約5日間隔で複数回散布する。
・天敵導入を予定する場合、導入時にハダニ類が多いと失敗しやすい。導入前に薬剤防除を行い、ハダニ類の増殖を抑制する。また、薬剤の選定時には天敵への影響を考慮する。

(4) 備考 ・[「園芸作物に発生したナミハダニの薬剤感受性検定結果」](#)を当センターHPに掲載中。

3 いちご アザミウマ類

(1) 発生予想 発生量：**平年並**

(2) 根拠 ・現在の発生量は平年並（平年比：ほ場率90%、発生株率116%）。(±)
・向こう1か月の気温は平年並、日照時間は平年並～少ない見込みで、発生にやや適していない。(－～±)

(3) 対策 ・ハウス内での増殖が主体となるので、発生が見られたらカスケード乳剤〔シロキアザミ〕かアタブロン乳剤〔シロキアザミ〕等のIGR剤を散布する。
・花を観察して、1割以上でアザミウマ類が見られた時は、被害が大きくなる恐れがあるため、ディアナSC等を散布する。

(4) 備考 ・[植物防疫ニュースNo.16\(いちご：アザミウマ類\)](#)、[「園芸作物と花きに発生したアザミウマ類の薬剤感受性検定結果\(続報\)」](#)を当センターHPに掲載中。

4 トマト 葉かび病

(1) 発生予想 発生量：**多い**

(2) 根拠 ・現在の発生量はやや多い（平年比：ほ場率204%、発生株率100%）。(+)
・向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並～多く、日照時間は平年並～少ない見込みで、発生にやや適している。(±～+)

(3) 対策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。
・肥切れ等により生育が衰えると発生しやすいので、肥培管理に注意する。
・発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き施設外で処分する。
・予防を主体にベルコートフロアブルやアフェットフロアブル等を散布する。
・発病初期にトリフミン水和剤やファンタジスタ顆粒水和剤等を散布する。

- (4) 備考 ・ 抵抗性品種でも発病するレースがあるため、発生に注意する。
[植物防疫ニュースNo. 17\(トマト：葉かび病\)](#)を当センターHPに掲載中。

5 なら 白斑葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：多い
 (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い（平年比：ほ場率109%、発生株率393%）。（+）
 ・ 向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並～多く、日照時間は平年並～少ない見込みで、発生にやや適している。（±～+）
 (3) 対策 ・ 施設内が低温多湿とならないよう、日中に適度な換気を行う。
 ・ 捨て刈りした葉は伝染源となるため、施設外に持ち出し、適切に処分する。
 発生初期にストロビーフロアブル、ポリオキシシンAL水溶剤を散布する。

6 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：平年並
 (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並（平年比：ほ場率74%）。（±）
 ・ 主要薬剤の殺虫効果が低下しており、密度抑制が困難である。（+）
 ・ 向こう1か月の気温は平年並、日照時間は平年並～少ない見込みで、発生にやや適していない。（-～±）
 (3) 対策 ・ 薬剤のかかり易い生育初期から防除を行う。
 ・ 葉裏をよく観察し、発生が見られたら、下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に気門封鎖剤やアグリメック（花き類・観葉植物）等を散布する。
 (4) 備考 ・ [「園芸作物に発生したナミハダニの薬剤感受性検定結果」](#)を当センターHPに掲載中。

7 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
いちご	灰色かび病	少	やや少	きゅうり	うどんこ病	やや多	やや多
トマト	灰色かび病	少	やや少	きく	白さび病	多	多
	コナジラミ類	平年並	平年並		アザミウマ類	やや多	やや多

秋冬期の病害虫防除対策

○イネ縞葉枯病、イネ黄萎病

- ・ 罹病した再生稲（ひこばえ）は次年度の伝染源となるため、早めに丁寧に耕起しましょう。

○トマト黄化葉巻病（TYLCV：タバココナジラミ媒介）

- ・ 罹病株は伝染源となるので見つけしだい抜き取り、抜き取った株は放置せず、速やかにビニル袋などで密閉し、枯死させてから処分しましょう。また、野外からのコナジラミ類の侵入が途切れる時期であるため、ハウス内に越冬虫を残さないための防除をこころがけましょう。

○農薬は適正に管理し、正しく使いましょう！

- ★ミツバチやマルハナバチに対する安全日数を目安に薬剤を選択しましょう。
- ★同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

1か月気象予報（予報期間11月15日から12月14日 11月13日気象庁発表）

平年に比べ晴れの日が少ない見込みです。向こう1か月の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、低い確率50%、2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

	低い（少ない）確率	平年並の確率	高い（多い）確率
○気温	30%	40%	30%
○降水量	20%	40%	40%
○日照時間	40%	40%	20%

○農薬の使用方法が変わります

農薬の残留基準値を設定する際に新たな評価項目が導入されたことに伴い、今後使用できなくなる農薬及び使用方法が変更される農薬があります。

農薬をラベルに記載された使用方法で使用した場合でも、今後改めて設定される農作物の残留基準値を超過する恐れがあるので、注意が必要です。

詳しくは農業環境指導センターのHP <http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html> をご覧ください。

詳しくは農業環境指導センター(Tel 028-626-3086)までお問い合わせください。
 病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部(@tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ <http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html> でもご覧いただけます。